

かにしておりたるやと問ふに、遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴音に潮のみちひをぞ悉るとよ
める歌あり、千鳥の聲遠く聞えつといひけり。

〔筆のすさび〕萬葉集に出雲守門部王思京歌

飲海乃河原之乳鳥汝鳴者吾佐保河乃所念國とあり、和名抄に出雲國意宇郡國府とあり、この時世の王政は郡縣なれば門部王出雲の任に往きて、奈良の京を懷ふてよみ給へるなれば歌の心自ら明らかなり、されば先年出雲松江の大守疾篤きとて、京醫畠柳安法印を招て治せしむ、法印松江に滯留間種々の饗應ありし中に、ある夜庭前沙上にて千鳥を鳴かせきかさんとて、數千羽の千鳥を庭上に放ちて啼さしめ給ふ、古今の佳興いふべくもあらぬ嘉饗にてありしよしなり、是珍しき饗應のみにあらず、深き趣ありてなり、出雲の洲には古くよりこのごとく千鳥をよみて旅況によせた古實に懐ひて風流の趣、文雅の趣、まことに嘆賞すべき事にてありし。

〔武江產物志〕水鳥類 信鳥ちどり 佃島なぎの 洲かほ 中川邊かもめともいふ

〔風俗文選〕百鳥譜

星月夜のおぼつかなき比は、磯のちどりのおほくあつまりて啼は、心もきゆべくてかなしただ人の別墅なる所に、水の湛もいと淺くて、晝は來馴てあそぶらん戸などかゑやりたる音に驚て、忽二三聲のすみ行は、其あとも遙に見送られて、河風塞しと思ひ出たるはまたるゝ人もなくて何にかはせむ、

〔書言字考節用集〕五形 鶩未ウトフ 善知鳥

〔藻鹽草十〕やすかた

子をおもふ涙の雨の笠の上にかかるもわびしやすかたの鳥、太神宮へ勅使下てうとふやすかたと云鳥を取て、三角柏と云樋に備て、神供にたてまつると也、此鳥取物は表笠をきてとる也、其